

Camp

Data Book 2007

キャンプがわかる!



キャンプが子どもを育てます

キャンプは遊び。
でも、人生に必要なことが
たくさん学べる遊びです。



！ 自然そのものが もたらしてくれる学び

自然の環境は、人間の五感に働きかける不思議な刺激に満ちています。これらの刺激は、私たちの感動や驚き、知的好奇心や探究心を呼び起こします。そして実物に触れる経験は、「知識」を生きることに役立つ「知恵」として定着させることに役立ちます。

！ 集団による活動・共同生活が もたらしてくれる学び

キャンプの小グループでの生活や活動においては、一人ひとりが自主的・主体的に行動し、協調性のある態度や行動をとることが求められます。キャンプは、他者との深い交流の中で信頼感を育て、よりよい人間関係のあり方を学ぶ機会を提供してくれます。

！ 自然の中での生活や活動が もたらしてくれる学び

自然の中での素朴な生活や活動は、向上心や想像力、環境保全や自然愛護への積極的な態度を育てます。また、キャンプで得ることのできる知識や技術は、危険を回避し安全を確保する能力、自らの安全は自らが守るという意識を高めます。

！ 新しい体験が もたらしてくれる学び

キャンプでのふだん味わうことのできない新鮮な体験は、これまで気が付かなかった自分の長所や能力を発見し、短所を知る機会となります。そして、新たな興味・関心を引き起こし、生涯を通じた健全で豊かなライフスタイルの形成にも役立ちます。

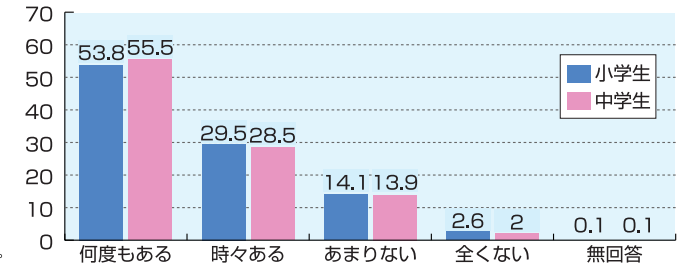
子どもに自然とふれあえる環境を！

このデータは、平成19年度に全国の小学生と中学生約221万人を対象にして実施調査された「全国学力・学習状況調査」結果の一部より、自然体験活動に関わる調査項目をいくつか抜粋したものです。

①海、山、湖、川などで遊んだことがありますか。

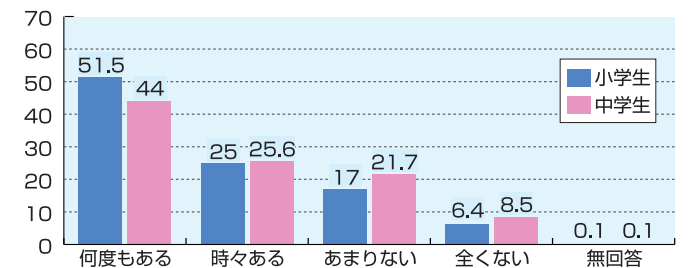
自然体験活動の「活動場所」である海や山、川での遊び体験で「何度もある・時々ある」と回答している子どもが8割強存在していることは喜ばしいことです。自然への原体験*は子どもの成長に大きく関わってきます。これからも子どもたちがふれあえる自然環境を守っていききたいものです。

*「原体験」…その人の、以後のものの方や考え方を支配するほどの重要な体験。



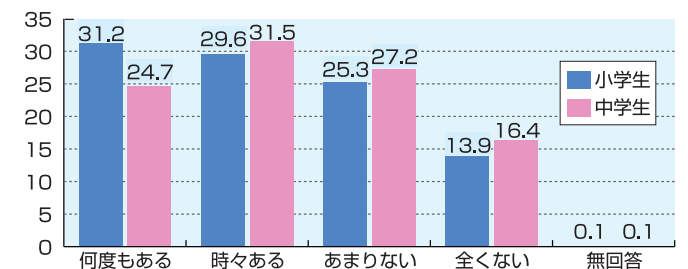
②魚や貝や昆虫を捕まえたことがありますか。

自然体験活動の中で、生き物を捕まえたことのある経験は小学生の方が多く、中学生は減少していますが、これは成長とともに生活様式の違いが出てきているためと思われます。



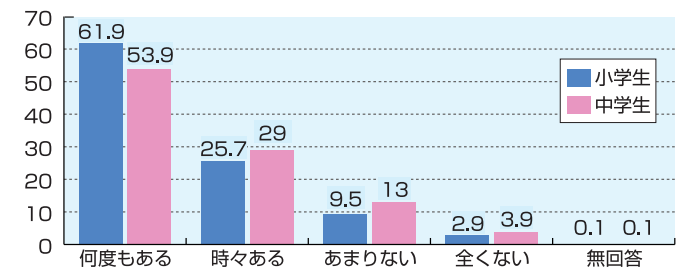
③木材を使ったものづくりをしたことがありますか。

自然体験活動の中には、豊かな心を育む創造・創作的活動があります。今回の調査結果を見ると「あまりない・全くない」という子どもの回答が多いようです。子どもにはものづくりの楽しさを体験させたいものです。



④包丁やナイフを使って調理をしたことがありますか。

「鉛筆を削れない」「魚を調理できない」などと言わない子どもには頼もしさを感じます。道具の正しい使い方は、生きる糧としてしっかりと身につけておきたいものです。



子どもたちとともに自然とふれあえる活動を生活の中に取り入れていきましょう。

数字で見るキャンプ 青少年教育施設とは？

①「青少年教育施設」…どんなところか知っていますか？

少年自然の家、青年の家、児童文化センター等を総称して、「青少年教育施設」と呼びます。このうち、キャンプでよく利用されるのが「少年自然の家」と「青年の家」ですが、「青年の家」には、宿泊できる「宿泊型」と、都市部にあって宿泊ができない「非宿泊型」があります。

ここでは、キャンプなどで利用される全国の「少年自然の家」と「青年の家（宿泊型）」のデータについて、文部科学省が3年に一度実施している「社会教育調査」（平成17年度）からみてみましょう。



少年自然の家と青年の家（宿泊型）は、全国に516カ所あります。
平成16年度には、約16,000団体、約665万人に利用されています。

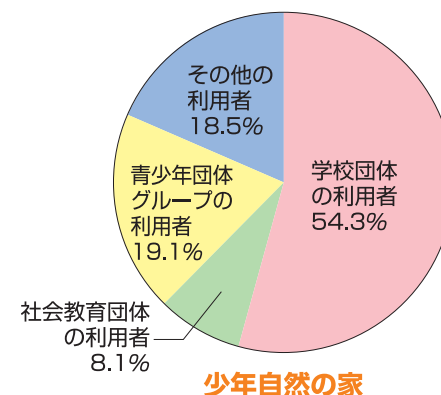
マメ知識

少年自然の家や青年の家は、場所によって「青少年センター」や「少年自然の家」など、さまざまな名称で呼ばれています。

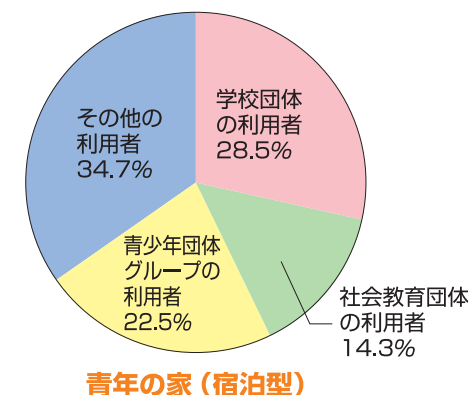
青少年教育施設は、国立・都道府県立・市区町村立に大きく分けられますが、最近では、指定管理者制度によって民間団体に管理運営を委託されている施設も多くなりました。例えば、静岡県立朝霧野外活動センターは、日本キャンプ協会グループが管理運営を担っています。

なお、国立青少年教育施設は、日本キャンプ協会の事務局がある「国立オリンピック記念青少年総合センター」と、「国立青年の家（13施設）」、「国立少年自然の家（14施設）」が平成18年度に統合され、独立行政法人国立青少年教育振興機構という組織になりました。これに伴い、国立青年の家は「国立青少年交流の家」、国立少年自然の家は「国立青少年自然の家」に名称変更されました。

② どんな団体が使っているのでしょうか？



少年自然の家

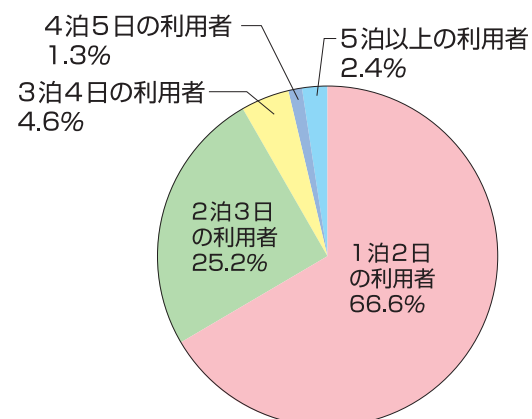


青年の家（宿泊型）

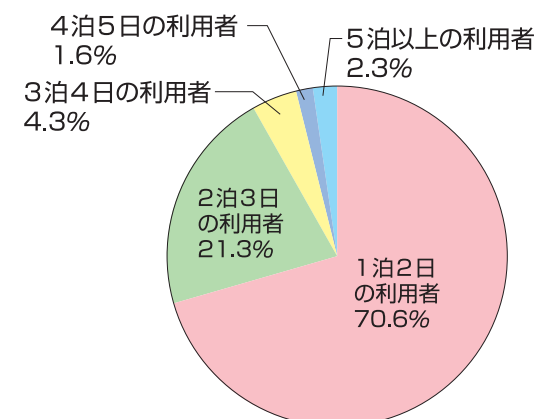
少年自然の家では、小学校や中学校など「学校団体の利用者」が最も多く、全体の半数を占めています。小学校や中学校の集団宿泊学習に多く利用されている結果であると思われます。一方、青年の家では、「学校団体の利用者」は3割弱で、「その他の利用者」が約35%と最も多くなっており、多様な団体が利用していることがうかがえます。

なお、「その他の利用者」は、両施設とも、施設の企画（主催）事業の参加者に加え、家族グループ、企業や行政などの職員研修などの利用者が多く含まれていると考えられます。

③ どれくらいの日数で利用されているのでしょうか？



少年自然の家



青年の家（宿泊型）

少年自然の家・青年の家ともに、90%以上が1泊あるいは2泊の利用者であり、ほとんどが短期の利用であることがわかります。現在、小学校の集団宿泊学習の長期化が進められようとしていますが、実際に長期で利用している団体はきわめて少ないようです。

キャンプ全国調査ダイジェスト版 ～キャンプスタンドの創造に向けて～

報告者：岡田成弘（筑波大学大学院・キャンプ全国調査プロジェクトメンバー）

1 キャンプで得るつながり

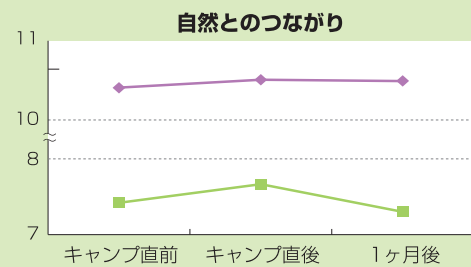
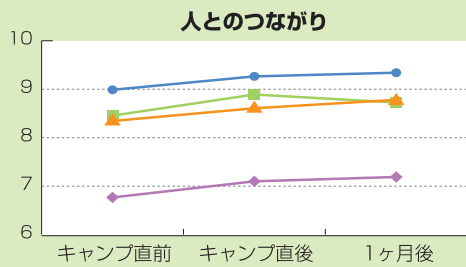
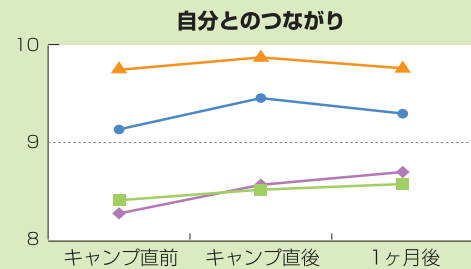
この調査は、日本キャンプ協会が、平成19年度文部科学省委託事業「青少年の意欲を育む体験活動に関する研究」として行ったものです。この調査では、「このようなキャンプをすれば効果が上がる」といった基準をつくりあげることを目指しました。

日本キャンプ協会公認キャンプディレクターに協力を呼びかけ、調査協力が得られた57のキャンプ事業（キャンパー数1604名）を対象に調査を行いました。

キャンプの効果を調べるために、アメリカキャンプ協会の全国調査でのアンケートを使って、自分とのつながり（自尊心、自立心、探究心、思考・判断力）、人とのつながり（リーダーシップ、友達作り、集団適応力、友人関係）、自然とのつながり（環境への関心、精神性）について調査しました。キャンプの前後での変化をみるために、キャンプ直前、キャンプ直後、キャンプ1ヶ月後に調査を行い、自分とのつながり、人とのつながり、自然とのつながりがどのように変化するかを検討しました。

調査の結果、キャンプの参加者は「自分とのつながり」、「人とのつながり」、「環境への関心」が向上し、日常でも維持されることがわかりました。

自然の中で集団生活を行い、仲間とともに様々な活動に取り組むキャンプだからこそ、自分とも、人とも、自然ともつながることができるんですね！

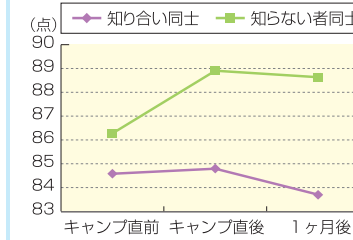


2 ちがいを比べて

それでは、どのようなキャンプが、参加者に変化をもたらすのでしょうか？

キャンプディレクター（キャンプの実施責任者）を対象に、キャンプの要素（参加者や班の特性、プログラム、生活・環境、指導者、マネージメントなど）をたずねました。そして、それぞれの要素ごとに57のキャンプをグループ分けし、キャンプの効果を比較しました。例えば、班を編成する際、知らない人どうしを同じ班にしたキャンプのグループと、知り合いどうしを同じ班にしたキャンプのグループとで分け、どちらのキャンプの方がよりキャンプの効果が上がったかを比較しました（より効果が上がったどうかは、統計によって判断しました）。

◆班編成について



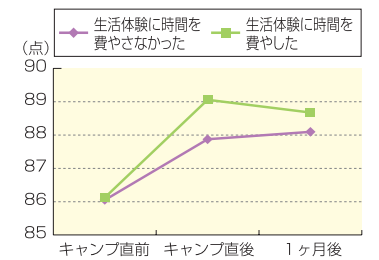
班を構成する時に、知らない者どうしを組ませた方が、知り合いどうしを組ませるより、キャンプの効果が高くなるという結果がでました。中でも、特に「人とのつながり」が向上していました。キャンプでは、初めて会ったメンバーとともに新しい社会集団をつくっていく過程で、コミュニケーション能力や社会性が育まれると言われてしています。以前から知っている友達よりも、初めて会った友達とキャンプ生活をともにすることが、人とのつながりにおける成長につながったのでしょう。

新たな出会いを大切に

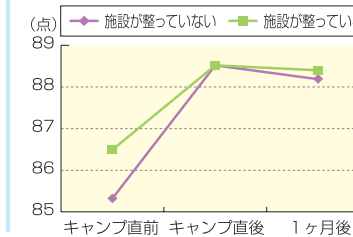
◆プログラムについて

キャンプのプログラムで、生活体験活動に時間をかけたキャンプの方が、キャンプの効果、特に「人とのつながり」が高くなるという結果がでました。キャンプでの生活体験には、野外炊事やテント泊などが含まれます。ふだんの便利な生活と違って不便なことばかりですが、だからこそ快適に過ごせるように工夫したり、仲間と協力したりするため、人とのつながりが向上すると考えられます。

不便だからこそ、協力・工夫



◆生活環境について



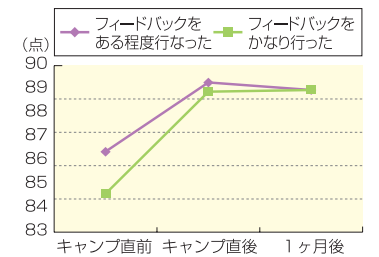
キャンプ場の施設は、あまり整っていない、もしくは何も無い方が、キャンプの効果（特に、自分とのつながり、自然とのつながり）が高くなるという結果がでました。施設が整ったキャンプ場の方が効果が高いのでは？と思うかもしれませんが、しかし、ありのままの自然を活用したプログラムや、足りないものは工夫したり我慢したりするキャンプ生活にこそ、教育効果が含まれているのではないのでしょうか。

ありのままの自然を活かして

◆指導者（スタッフ）について

キャンプ中のスタッフの指導について、ディレクターからフィードバック（指導についてのアドバイス）をしっかり行っているキャンプの方が、キャンプの効果がより向上するという結果になりました。キャンプ中にしっかりフィードバックを行うことがスタッフの成長につながり、さらにキャンパーの成長につながるでしょう。

スタッフもキャンプの中で成長する



調査結果の読み取り方

様々な要素が含まれるキャンプの特性や、このプロジェクトの方法を考慮すると、キャンプの構成要素（プログラム、参加者、指導者、生活・環境等）を満たせば、必ず効果が上がると言い切ることはできません。例えば「自然環境が豊かなら、キャンプの教育効果が高い」という解釈ではなく、「自然環境が豊かな方がキャンプの教育効果が高くなる可能性がある」という解釈の方が妥当です。また、自然環境にあまり恵まれていないキャンプであっても、それ以外の要素の「質」を高めることによって、より高い効果が得られます。また、自然環境の豊かさに頼って活動内容が乏しいようならば、当然教育効果は期待できません。このプロジェクトで得られた結果は、あくまで、より良いキャンプを行うための「目安」とし、各団体の実態に合わせ柔軟に活用していただくのがよいと考えます。

※グラフの読み方 結果を表すグラフのキャンプ前の差をないものとして見ると、実際の統計結果がわかりやすくなります。

キャンプ なるほど データ

キャンプは、自然環境、活動内容、指導者、仲間などのさまざまな影響を受けて、心身の成長や健康にとってもよい効果があることがわかってきました。そこで、いくつかの研究からわかってきた「なるほど」の発見について紹介します。

キャンプでサッカースクールが変わる!?

近年、プロスポーツにおけるチーム力強化や、育成年代スポーツ選手における総合的な人間教育として、キャンプが注目されています。日本キャンプ協会でもJリーグ（日本プロサッカーリーグ）と連携し、夏のサッカーフェスティバルや育成年代の指導者の研修にキャンププログラムを提供をしています。

日本サッカー協会ではサッカー育成年代に対し、サッカーの技術や体力だけでなく、自分自身に誇りを持ち実社会に貢献できる人間教育を行うことを目標に掲げ、off the pitch行動の重要性を挙げています。off the pitch行動とは、ゲームやトレーニングなどのサッカーに専念しているon the pitch行動に対し、サッカーから切り離された日常での行動やふるまいのことです。今後このムーブメントはサッカー界だけではなくあらゆる競技スポーツ団体に普及していくと考えられます。

埼玉県にあるサッカースクールジョモニックでは、スクールの理念である①人間力の育成、②コミュニケーション力の育成、③健全な家族とコミュニティの創世をさらに推進するために、平成18年度からスクール生を対象にキャンプ事業を開始しました。そこでこんなデータができました。

サッカーコーチは有能なキャンプカウンセラーになれる!

サッカースクールジョモニックでは、キャンプの専門家がスーパーバイザーとなり、普段はサッカースクールのコーチが、班付きのカウンセラーとなって、スクール生を対象とした4泊5日のキャンプを行いました。事前に1泊2日のスタッフトレーニングをしただけで、全員がキャンプ指導は初めてのコーチです。ところが、キャンプを終えてみると、参加した子どもたちのoff the pitch行動が向

上し、サッカースクールにもどっても一部維持されていることがわかりました。スポーツ指導者は一般的に、体力や活力があり、コミュニケーション力や集団マネジメント力が高いことで知られています。これはキャンプ指導者としてとても重要なスキルです。つまり、基礎的な野外生活技術を身に付けることで、高い教育効果を上げるための有能なキャンプ指導者となる可能性をもっているのです。

図1 off the pitch行動の変化

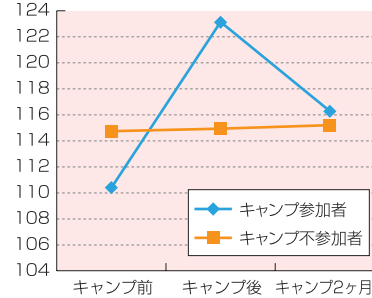


図2 「現実肯定」の変化

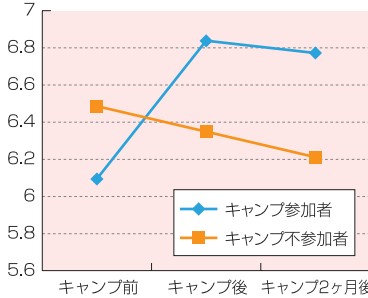


図1はoff the pitch行動の全体得点です。off the pitch行動尺度は信州大学の福富ら(2004)が作成したもので、「非依存」、「積極性」、「明朗性」、「社交性」などのスキルから構成されます。全体得点は、キャンプ後有意に向上し、キャンプ2ヶ月後まで維持されませんでした。図2に示す通り「現実肯定」と「まじめ勤勉」は、キャンプ2ヶ月後までキャンプの効果も維持されました。福富信也・平野吉直・高瀬宏樹(2004)「キャンプ経験が育成年代のサッカー選手のoff the pitch行動の及ぼす影響」、キャンプ研究8-2、11-16頁

キャンプ指導経験がコーチを変え、スクールを変えていく

スポーツの指導には、監督やコーチのスポーツ観が大きな影響を及ぼすことがわかっています。そこで、サッカースクールジョモニックでキャンプを指導したコーチを対象に、スポーツ観の変化を検証しました。その結果、非競技志向を表す項目が、キャンプに参加していなかったコーチよりも高くなることがわかりました。また、競技志向を表す「目標達成」もキャンプ後向上しましたが、

この原因として、キャンプの冒険的な要素が影響したと考えられます。つまり、より総合的にスポーツ観、スポーツのもつ魅力を伝えられる指導者になっていったということです。これは、総合的な人間力の育成をめざすスクールの理念を達成するためにも、とても重要なことです。

図3 「地域活性」の変化

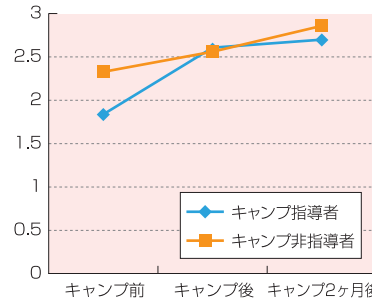
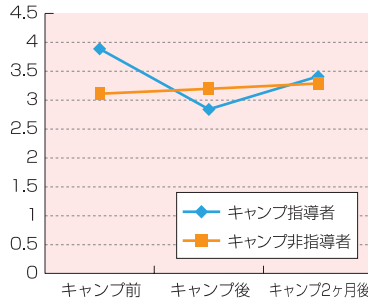


図4 「専門知識・理論的指導」の変化



サッカーコーチのスポーツ観をさまざまな側面から評価したところ、非競技性を表す「スポーツを通して地域の活性化を図ること」がキャンプ後向上し維持されました(図3)。逆に、指導者に求められる資質として競技性を表す「競技の特性や技能に関する専門的知識があり、理論的な指導ができる能力」はキャンプ後低下しました(図4)。地域に密着したキャンプ運営が求められたり、指導者に専門的知識があるだけでは高い教育効果を得ることのできないといった、キャンプ指導の特性が、結果に影響を与えたと考えられます。

また、キャンプ後のインタビュー結果から、「キャンプでサッカースクールでは見られない子どもたちの新たな一面を発見した」、「キャンプ後に子どもたちの経験をサッカースクールでの指導に活かすことができた」といったコメントが得られました。このことから、キャンプ指導者にとって最大の難題である「日常へのフィードバック」のために極めて有効な支援体制をサッカースクールは潜在的にもっていることがわかります。今後キャンプで培ったノウハウがスポーツ界に発展し、よりよいものに進化していくといいですね。

出典：育成年代サッカースクールにおけるキャンプ導入の意義—育成年代サッカー選手のoff the pitch行動と指導者のスポーツ指導者観に及ぼす効果に着目して—、筑波大学平成19年度卒業論文、麻生耕平(筑波大学野外運動研究室)調査

■スクール代表



タグチ ヨシノリ
田口 禎則

代表歴

U-18、U-21、日本B代表、日本代表('90~'92)
サンフレッチェ広島('94)→浦和レッズ('94~'98)

指導歴

2003年~ JFAナショナルトレーニングスタッフ
2007年~ ユニバーシアード代表
日本女子代表監督就任
2008年~ 日本サッカー協会公認
S級コーチライセンス取得

Love your football.



Soccer school Jomonic

スクール理念

- サッカースクールジョモニックでは、サッカーを通じて、「がんばること」「あきらめないこと」「挑戦すること」「フェアであること」などのすばらしさを教えてきます。
- 心身の健やかな成長とともに、将来の自立の芽になるような価値観を育てていくことを目標とします。
- 成長段階に合わせて、長期的な視野に立った指導カリキュラムでサッカー選手としての土台作りをしていきます。

南与野校、戸田校、南浦和校、上尾校の4校でサッカースクールを展開しています。
対象は5歳から小学校6年生までとなっており、南与野校ではガールズクラスも展開しています。
2008年 全生徒数1140名

<http://www.jomonic.com/>

青少年の体験活動等と自立に関する実態調査 平成18年度調査

学校内外での体験活動の実施状況は？

子どもたちの体験活動は、「学校の授業や行事」と「学校の授業や行事“以外”」でどのように行われているのでしょうか。[図1]は、平成18年4月から平成19年1月までの間で、それぞれの活動を「し

た」と答えた子どもの割合です。学年や活動の場所によって、体験活動の実施状況にはいろいろな違いがあるようです。

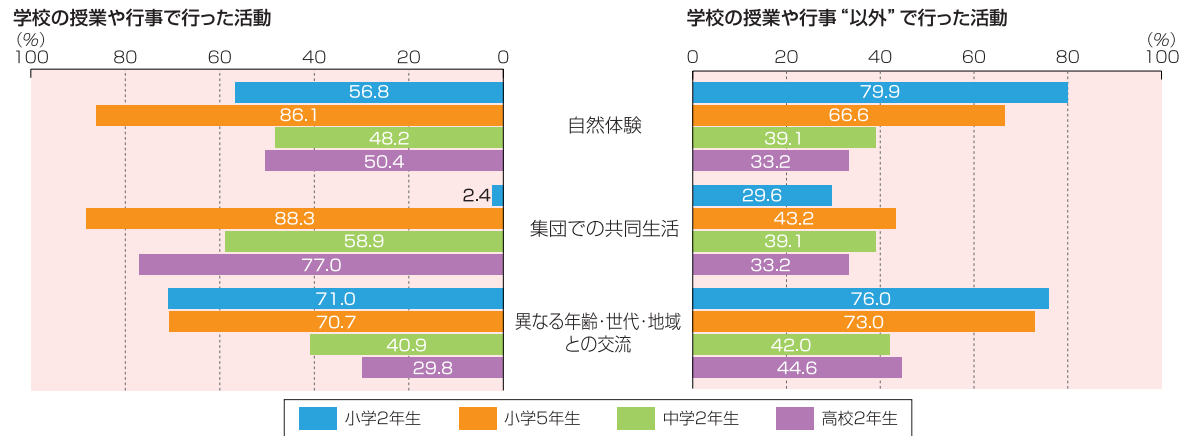


図1 学校内外での体験活動の実施状況(単位は%)

自然体験活動をしているのはどんな子ども？

自然体験活動をたくさんしているのはどんな子どもたちなのでしょう。ここでは調査結果の中から、自然体験活動の実施状況に関するデータを集めてみました。

①青少年団体に加入している子どもほど、自然体験活動を多く行っている

青少年団体への加入状況と、学校外での自然体験活動の実施状況の関係についてみると、青少年団体に加入しているほど、自然体験活動を多く行っている傾向が見られます。特に小学生での関連の高さが顕著です。

青少年団体の加入

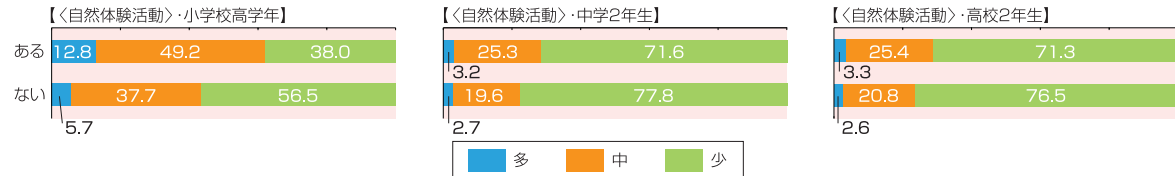


図2 青少年団体への加入と〈自然体験活動〉の関係(単位は%)

②保護者が地域活動を経験している子どもほど、自然体験活動を多く行っている

保護者の地域活動の経験と子どもの学校外での自然体験活動の実施状況の関係についてみると、保護者が何らかの地域活動を経験している場合、子どもが自然体験活動を多く行っている傾向が見られます。地域活動の内容に注目すると、「ボーイスカウトなどの青少年活動」を行っている場合が特に多くなっています。

保護者の地域活動の経験【〈自然体験活動〉・小学校高学年】

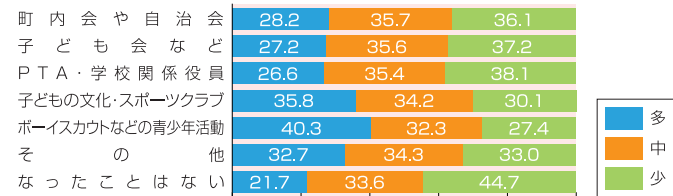


図3 保護者の地域活動の有無と〈自然体験活動〉の関係(小学生のみ)(単位は%)

青少年の自立と自然体験活動の関係は？

[図4]は、学校外での自然体験活動の実施状況と、今回の調査で作成した自立に関する指標の関係についてまとめたものです。小学生から高校生まで、どの学年でも学校外での自然体験活動が多いほど、自立に関する指標の得点が高い傾向が見られます。もちろん、体験活動と自立の間には、さまざまな要素が関連して

いると考えられますから、ここでのデータから、一概に「自然体験活動を行ったから自立した」とは言えませんが、自然体験活動を多くしている子どもには、〈自律性〉や〈協調性〉が高い子どもが多いようです。

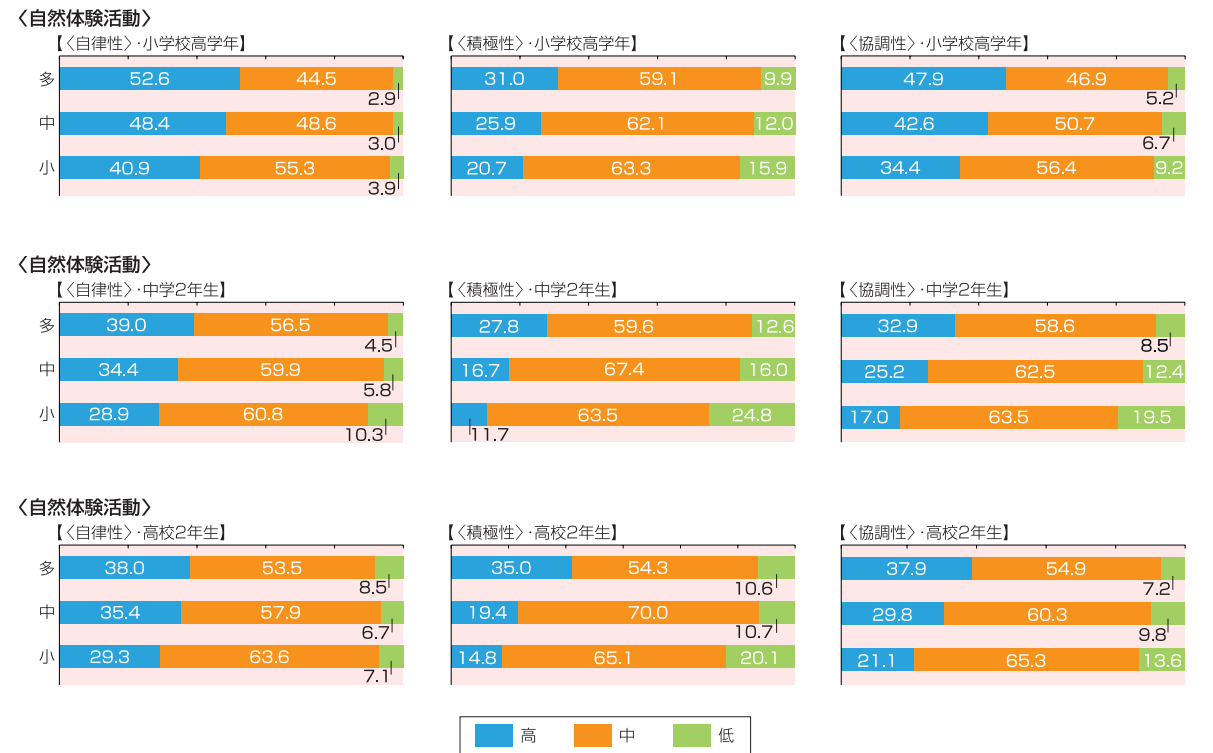


図4 〈自然体験活動〉と自立に関する指標の関係(単位は%)

◇図の見方

図の中での、〈自然体験活動〉や〈自律性〉〈積極性〉〈協調性〉などの指標は、今回の調査結果をもとに以下のように作成したものです。詳細については、調査報告書を参照してください。

〈自然体験活動〉

「昆虫や水辺の生物を捕まえること」や「星や雲の観察」などの17項目の自然体験活動について、平成18年4月から平成19年1月までの間に学校の授業や行事以外で「何度もした」場合を2点、「少しした」場合を1点、「しなかった」場合を0点として、17項目の合計得点(34点満点)を求めたもの。高:34~11点、中:10~6点、低:5~0点として集計した。

〈自律性〉〈積極性〉〈協調性〉

「自分のできることは自分でする」や「相手の立場になって考える」などの15項目の自立的な習慣が自分にどれくらい当てはまるかを質問した結果から、因子分析という統計手法を用いて作成したものです。それぞれ12点満点で、高:12~9点、中:8~5点、4~0点として集計した。

※このデータは、独立行政法人国立青少年教育振興機構が、青少年の体験活動等と自立の実態を調べるため、平成18年度に全国の小中高生約18,000人と、保護者約16,000人に対して行った調査結果の一部です。調査結果は、「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査報告書 平成18年度調査」平成20年3月にまとめられています。

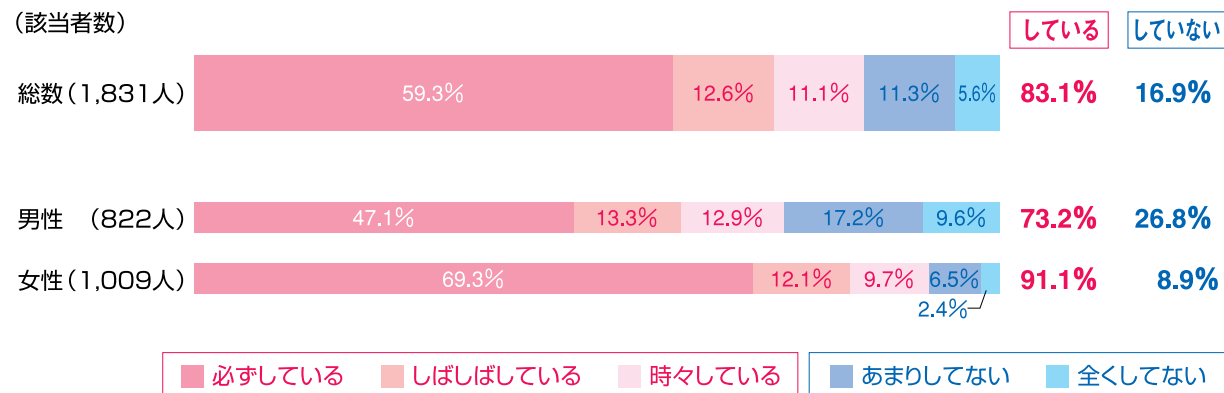
キャンプで変わる？「食」への意識

健康や食生活に関わる言葉を耳にすることが多くなりました。「食育」、「メタボリックシンドローム」、「飽食の時代」、「もったいない」など…。豊かな生活を求めるための経済発展は、大量生産と大量消費をうながしました。わたしたちの周りには物があふれ、お金で何でも買える時代となりました。その反面、飢餓に苦しむ人々が世界には多くいます。

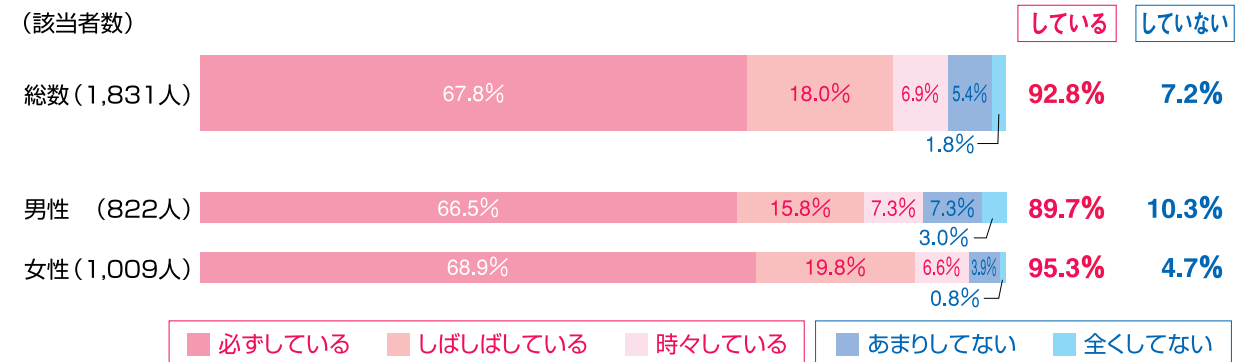
平成17年6月に「食育基本法」が成立し、健全な食生活の実践や食に対する感謝の念と理解を深めることなどが求められるようになりました。内閣府食育推進室は平成19年5月、食育の意識や実践について調査した報告書を出しています。この報告書から抜粋すると、「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをしているのは、各年齢層ともに男性よりも女性の方が高くなっています。「食べ残しを減らす努力をしていますか」との質問では、「している」と回答した割合が全体で92.8%となっています。「食べ残しや食品の廃棄に対する意識」については、「もったいない」と感じている割合が高いものの、若い年齢層では男性・女性ともに「いつも感じている」割合が低くなっています。この調査は全国20歳以上の男女を対象としており、子どもの食育についてのデータはありませんが、「食」をキャンププログラムとして活かすための参考となるでしょう。

「食」をテーマとする「食育キャンプ」も各地で実践されているようです。キャンプの食事は、「つくる」・「食べる」・「片付ける」という各段階で、多くの意味を追求することができます。お金を払えば調理された食べ物が出てくるわけではありません。炊事の段取りを相談し、役割分担に沿って調理することや、感謝の気持ちで残さずにいただくことは、日本人が失いかけている大切なものを確認するよい機会となるのではないのでしょうか。

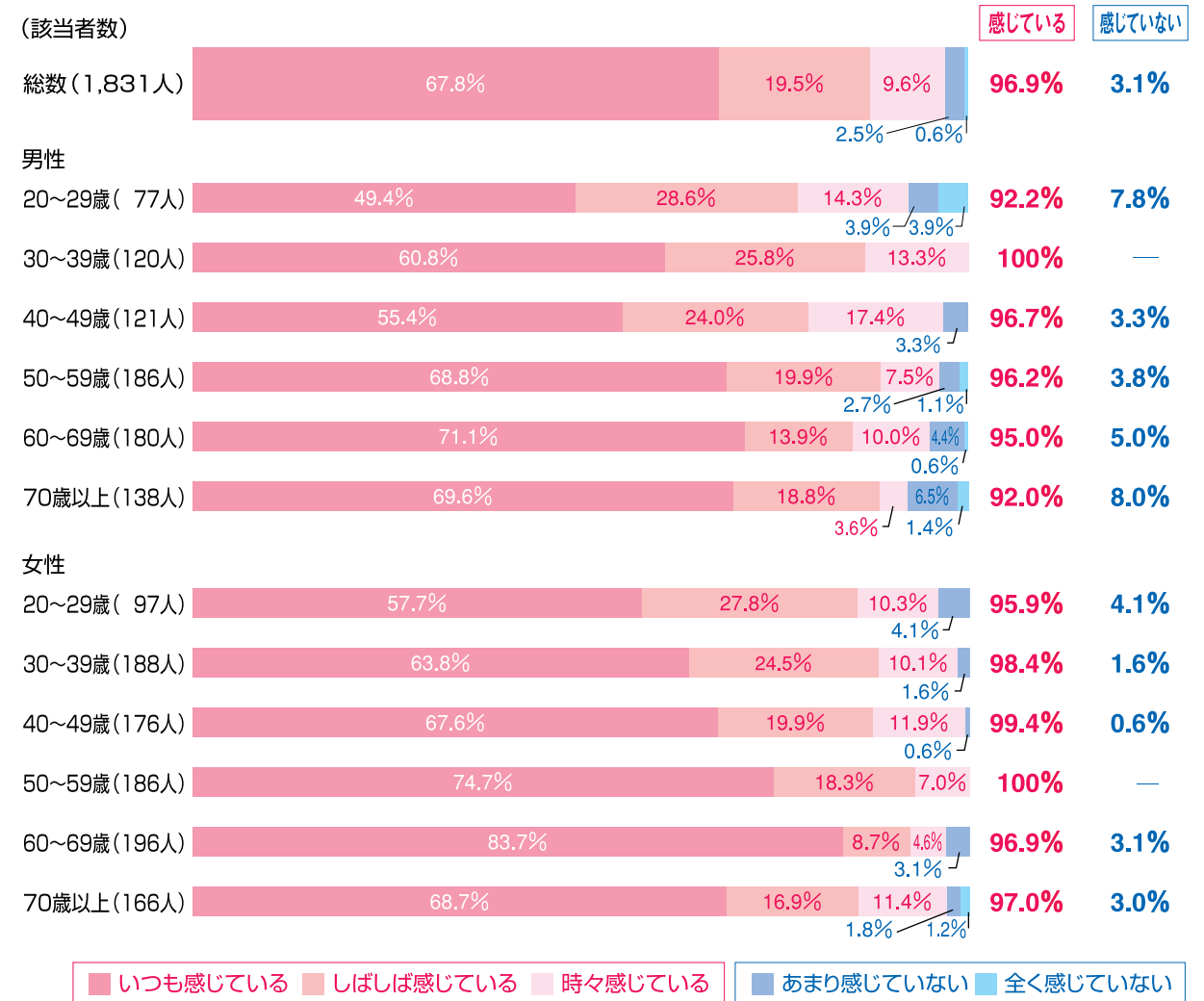
食事のあいさつ



食べ残しを減らす努力



食べ残しや食品の廃棄に対する意識



良いキャンプには良い指導者が必要です

日本キャンプ協会ではキャンプ指導者の養成をしています。それは、質の高い自然体験のためには、良い指導者が不可欠だからです。資格を持っている指導者は全国に約2万5千人。全国の様々なアウトドアシーンでキャンプ指導者が活躍しています。



全国のキャンプ場数
2,130カ所

平成17年度社会教育調査より

全国のキャンプ人口は520万人+α

オートキャンプ人口(520万人)に、学校や社会教育団体で行われている自然体験活動の参加者を加えたものをキャンプ人口ととらえます。(まだ正確な数字を得ていません。)(レジャー白書2007より)

都道府県別指導者数

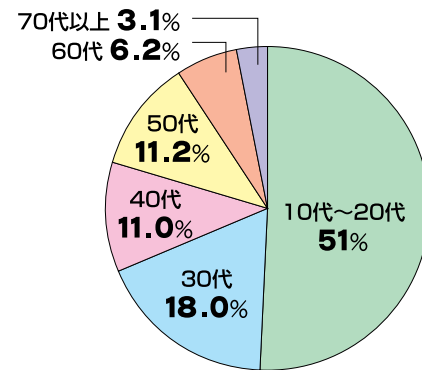
ベスト5

1. 東京都 **8,169** 名
2. 埼玉県 **1,963** 名
3. 愛知県 **1,608** 名
4. 大阪府 **1,517** 名
5. 神奈川県 **1,175** 名

1県あたり平均 **577** 名

※ 各県協会に所属する指導者数を表しています

指導者の年齢構成

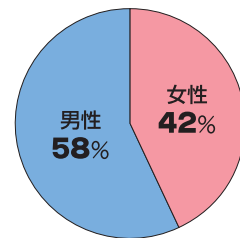


資格別会員数

- キャンプディレクター1級 **1,184** 名
- キャンプディレクター2級 **2,585** 名
- キャンプインストラクター **21,636** 名
- 合計 25,405** 名

※ キャンプインストラクターは20時間、ディレクター2級は80時間、ディレクター1級は160時間の学習内容を修了した指導者です。

登録指導者の男女比



(2007年3月現在)

キャンプ・インフォメーションセンターから

社団法人日本キャンプ協会では、キャンプのことなら何でも相談に応じる「キャンプインフォメーションセンター」を開設しています。2007年の相談実績から、キャンプの傾向を見てみましょう。

2007年1月から2007年12月の相談実績

相談内容のベスト5

- ① プログラムの相談 情報提供 **38%**
(キャンプの企画・運営についてのアドバイス、アウトドアでのゲームやキャンプファイヤーについて、安全管理、野外生活技術について、資料請求など)
 - ② キャンプ紹介 **15%**
(子どもが参加できるキャンプ、スキーのプログラムや団体を紹介)
 - ③ キャンプ場紹介 **14%**
(個人の条件に合ったキャンプ場、団体でのプログラムができるキャンプ場など)
 - ④ 指導者紹介 **11%**
(学校や地域キャンプの企画・運営、キャンプファイヤー指導、アウトドアスキル講習会等の講師など)
 - ⑤ 取材・出演依頼 **7%**
(連休・長期休暇に向けたアウトドア特集や安全特集の取材、アウトドアスキルの指導・助言のためのテレビ出演など)
- * その他 **15%**
(資格や事業に関する問い合わせ、協会HP・発行物等に関する問い合わせなど)

2007年は、取材対応が多く求められた年でした。また、プログラム相談では安全に関するものが増えてくるなど、キャンプの「質」に、より目を向けられはじめた年であったといえるでしょう。

■ キャンプインフォメーションセンターへのお問い合わせは

Eメールで info@camping.or.jp

電話で **03-3469-0233** (月~金/10:00~18:00)

FAXで **03-3469-0504**

手紙で 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内

専門のコーディネーターがお答えいたします。

Camp Data Book 2007

2008年3月31日発行

編集 社団法人日本キャンプ協会 調査研究委員会

平野吉直 大石示朗 井上忠夫 岡村泰斗 甲斐知彦 小泉紀雄 坂本昭裕 多田聡 月橋春美 戸室勇児

発行者 酒井哲雄

発行所 社団法人日本キャンプ協会 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立青少年センター内

TEL : 03-3469-0217 FAX : 03-3469-0504

E-mail : ncaj@camping.or.jp URL : <http://www.camping.or.jp>

印刷 大日本印刷株式会社

発行 10,000部



NCAJ

National Camping Association of Japan